

---

# 勇者の条件

穿月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者の条件

### 【Nコード】

N41400

### 【作者名】

穿月

### 【あらすじ】

これはある少年のお話。勇者を目指して歩んだ果ての、出来損ないの物語。

この世界に救いが無いなんて嘘だ。だって勇者はここにいる

それは突然のことだった。

なんでもない、どこにでもいる平凡な高校生の俺は下校途中に突然現れた光に飲み込まれ、気付けば祭壇の上で呆けつと突っ立っていた。

目を閉じた一瞬で見たことも無い場所に移動していたなんて信じたくないし、信じられるわけが無い。これは夢だと自分自身に言い聞かせるが、俺の五感全てはこれは現実だと声を大にして主張してくる。

どうすればいいんだと途方に暮れる俺の耳にわずかに届いたのはざわめき声。そこで俺は自分のいる祭壇の下に人の気配がすることによつやく気がついた。見下ろせば、そこにはまるでゲームに出てくる神官みたいな格好をした人々。口々に成功だ、とか、勇者だ、とか言っている。いや、正確には言っているわけじゃない。耳に入ってくるのは聞いたことのない言語で、けれどその言語がどういう意味なのかを頭が自然と理解していた。

これがいわゆるご都合主義的展開というやつだろうか？　なんて、どうでもいいことに思考を逃避させる。だって、そうでもしないとやっていられないじゃないか。

そんな俺の前に一人の老人が進み出て跪いた。

「突然のご無礼をお許しください、勇者様」

それからの出来事は長つたらしいので割愛するが、要約すると魔王を倒してほしって話だ。

出来ることなら御免こうむりたかったが、帰るには魔王を斃して鍵を得るより他にないなどと言われては受ける意外の選択肢は無かった。いや、実のところ勇者として持て囃されることで少しばかり調子に乗っていたのかもしれない。まあ、要するに、なんだかんだ

で俺は勇者として魔王と戦う役目を受けてしまったのだ。

なんでも、俺には勇者としての力があるらしい。だからと言って、使えなければただの宝の持ち腐れだ。まずは扱い方を知らなければならぬだろうということで話がついて、俺は剣と魔法の扱い方を教わった。

教わる、といっても殆どが技術的なもので一日千本素振りとか血反吐を吐くまでトレーニングとか、そういう辛そうなのは一つもない。勇者補正がかかっている俺は基礎的な力 筋力とか魔力とか がほとんどカンスト状態らしく、必要なのは鍛錬ではなく慣れにあるそうだ。本当に、これをチートと言わずして何をチートと言うのかって感じだな。

十

まあ、そんなこんなで数日が過ぎた。そんなある日、国王から示された一つの案件。それは魔物によって襲われた村を視察してきてほしいというものだった。いずれは行かなくちゃならないわけで、断る理由も見当たらないとなれば答えは一つ。俺は王の提案を二つ返事で承諾した。

村は目を覆わんばかりの酷い有様だった。わずかに生き残った人々も深手を負い、村は再建を諦める以外の選択肢が見当たらないほど荒れ果てている。

皆が泣いていた。思い出の詰まった家を、愛しい家族を失って、もう涙が出ないくらいに泣いて、それでも足りないとかばかりに枯れ果てた声でまだ慟哭していた。

悲嘆に暮れる人々の涙に心が疼む<sup>いた</sup>。

みんなを守るように頑張ろうと、自分自身に気合を入れる。もちろん不安だつてある。でも

俺は人々を救わなければならない

何故なら、勇者とは人々を救えるだけの力を持っているからだ

もう、こんなふうには悲しい思いをする人を出さないためにも俺は全力で戦い抜こう。この時、俺は心にそう誓ったんだ。

十

召喚されてから一月が経ち、俺は初めての戦場に立った。遠くから黒い群れが押し寄せてくる。だんだんと近づいて来るに従い、黒い塊にしか見えなかったそれもはつきりとし始め、やがて、隊の先頭がぶつかり戦が始まった。

人と魔物が互いに殺して、殺されて、瞬く間に大地が血に濡れていく。

戦いの波がいよいよ俺のところまで押し寄せてきたところで俺はあることに気がついて愕然とした。

魔物というから、もつと怪物染みた存在を、理性も知性も無く本能のままに襲い来る獣のような存在を、俺は想像していた。けれど、そこにいたのは人と何等変わらぬ存在だった。

確かに、人には鱗や翼は無い。全身を覆う体毛も、鋭い爪も、額から伸びる角もない。ああ、魔物と人間は確かに別の生物なのだろう。でも、それだけだ。他に違いなんて無かった。

人間とは全く異なった言語で構成される魔物の叫び。それは敵に非道に否定する憤怒であり、己の死を恐れる悲鳴であり、仲間の死を嘆く慟哭だった。その姿には人も魔物もない。飾ることのないありのままの感情が衝突し、互いが互いを憎しみあっていた。

「やめろ、やめてくれ!!!」

考えるよりも先に出た言葉は、けれど剣戟と爆発に掻き消されて

跡形も残らない。それに、たとえ誰かの耳に届いたところでなんになるだろうか。こんなことで戦が止まることなどありえない。その程度で止まるなら最初から争ったりなんてしないのだから。

血で血を洗う暴力の嵐が広がってゆく。

目の前で、仲間の人間に魔法弾が直撃して爆散した。

すぐ隣で、敵の魔物が真つ二つに斬り捨てられた。

手が震え、足から力が抜ける。怖い、怖い。背中合わせの死が怖い。でも

俺は勇気を失ってはならない

何故なら、勇者とは悪に背を向けることなど許されないからだ

なけなしの勇気を振り絞って俺は戦った。

勇者の力で強化された俺の身体は常人を遥かに凌ぐ筋力と体力、そして魔力を有する。その力を最大限に使った俺に敵うやつなんていない。

俺は戦って戦って、殺して殺して、殺し尽くした。

戦いは俺たちの側、人間の勝利。夜には宿舎で勝利の宴も開かれた。でも、俺はそこにはいられなかった。

皆が勝利を祝い合い、盛り上がっている場を俺はそつと離れ、物陰に座り込む。

手にはまだ感触が残っていた。剣で魔物の喉を一突きにした感触が、溢れ出した血が手を濡らす温かな感触が、まだ、残っていた。

込み上げる吐き気。耐えることなんて出来やしない。堪らず全て嘔吐した。吐いても吐いても止まらない。胃の中はもうとつくに空っぽで、胃液さえ出ないほど吐いたのにまだ気持ち悪い。

命を奪うということがこんなにも恐ろしいなんて思わなかった。

止まることのない体の震えが身体を襲う。

それでも、俺は戦わなくちゃならない。人々を救うという正義が目の前にあるなら、俺はその道を進まなくちゃならないんだ。

どんなに強大な力を持っていても、心までは強くなれない自分が恨めしい。

痛みも恐怖も全て呑み込んで進み続けるのは辛くて、苦しくて、すぐにでも逃げ出せるならどんなにいいだろうかと思う。でも

俺は正義を裏切ってはならない

何故なら、勇者とは正義の味方であることを求められるからだ

俺は戦って戦って、殺して殺して、歩み続ける。立ち止まることなく、勇者への道をただひたすらに。

結局、殺す度に込み上げる吐き気には最後まで慣れることが出来なかった。戦のあった夜は人目に付かない場所で何も出なくなるまで嘔吐を繰り返し、眠れば悪夢に魘される日々。

それでも俺には退くという選択肢はない。魔王を倒して、この悪夢もさつさと忘れるんだと、そう思うことで俺は自分を保った。

十

辛く苦しい日々を乗り越え、魔王城まであと少しという距離まで近づいたある夜のこと。俺は仲間の声をかけられ、連れられるままに後を追った。

不意に立ち止まり、こちらを振り返って真っ直ぐに俺を見つめる彼女。その瞳は真剣そのものだが、わずかに怯えが窺える。頬も赤く色づいていて、どこか恥ずかしげな様子だ。

「何か、あったのか？」

いつまでも話す様子がない彼女に俺はそう訊ねる。すると、彼女は一度大きく深呼吸して、意を決したように口を開いた。

「私、あなたのことが好きなの」

魔物と勇敢に戦い、人々を救おうとする優しさに惹かれたのだと彼女は言う。

なんとなく予想はしていたことだったからか、思っていたよりもずっと冷静な自分がいた。周りの仲間にもそれとなく教えられていたから尚更かもしれない。きっと、以前の俺だったら絶対に取り乱していただろうな。なんて、そんなことはどうでもいいか。想いを告げられたなら当然ながら返事を返さなくちゃならない。

少しだけ胸が痛む。けど、答えは決まっていた。

「ごめんな」

それがどういう意味を含んでいるか、解らない彼女ではない。涙ぐむ目尻を押さえて走り去る背を見送る。彼女が悪いわけじゃない。彼女は明るくて優しく美しくて、その上実力もある。本当に、俺では役者不足なくらいに魅力的だ。

けれど、俺は彼女を受け入れることはできなかった。

独りは怖い、独りは寂しい、独りは寒い。そんな思いは確かにある。でも

俺は孤独でなければならぬ

何故なら、勇者とは平等に人々を守らなければならないからだ

俺は皆を平等に守らなくちゃならない。そのためには特別な誰かをつくってしまつては駄目なんだ。いざと言う時に、感情に惑わされて優先順位を違わなかったために。

しばらくすると一人の騎士が宿舎から出てきて俺を罵った。確か、彼は彼女の幼馴染だった筈だ。一目見ただけでもすぐに分かるくら

いに彼は怒っていた。

その姿を見て、俺は確信する。彼なら、彼女を深く想っている彼ならきつと彼女を幸せに出来るだろう、と。少なくとも俺なんかよりは余程良い。

何も感じてないように装って一芝居打つことを決める。

「俺は彼女のことをなんとも思っていないからな。そんなに怒るくらいなら、お前が行って慰めてやったらどうだ？ 今なら簡単にものにできるかもしれないぞ」

我ながら、なかなか嫌な奴を演じられたと思う。その証拠に糞野郎という言葉と共に拳が飛んで来た。力を使えば簡単に避けられるそれを、俺は甘んじて受け入れる。彼女を傷つけた罰と言っわけではないけれど、どうしても避ける気にはなれなかった。

彼女が走り去った方向へと駆けて行く騎士。その姿を見て、なんだか無性に寂しさを感じた。

早く元の世界に帰りたい。家族がいて、友達がいる温かい元の世界に。

十

俺は次の日も何もなかったかのように振る舞って行軍を続け、ついに魔王城へと辿り着いた。

門番を殺し、衛兵を殺し、近衛を殺し、そして魔王と対峙する。

さすが魔王と呼ばれるだけあって強大な力を持った魔物だったが、それでさえも俺の敵ではない。乱舞する魔弾の雨を掻い潜り、俺は剣を突き出した。魔王の心臓を貫いた剣から伝わる鼓動。それが徐々に弱まり、そして数秒もしない内に消え去った。

魔王は死んだ。俺が、殺した。

これで終わり。もう誰も死なないですむんだから、あとは元の世界に帰るだけだ。今、俺の手には帰るための鍵だっである。

けど、本当にいいのだろうか？ 俺は数え切れないほどの命を奪

つてきた。もし罪というものが奪った命の数に比例するなら、俺は永遠に赦されない。そう断言できるほどの数の命を刈り取ってきた。そんな俺が、元いた世界に帰ってのうのうと生きていいのだろうか？ここに来てようやく考えるに至った己の罪。心を締め付けるような息苦しさから逃れようと俺は城の窓から外へと視線を向けた。

そして、見た。見てしまった。

窓の向こうに広がるのは阿鼻叫喚の地獄絵図。逃げ惑う魔物。人間で言うところの市民だろう。戦う術も持たずに悲鳴を上げている。そんな魔物たちを容赦なく殺して、殺して、殺し尽くす人間たち。胸が疼む。それでも、俺はこれで良かったんだと自分自身に言い聞かせた。

俺は自分を捨てなければならぬ

何故なら、勇者とは常に弱者を優先しなければならぬからだ

い。  
そんなの、無理だ。もう、見てみない振りなんて続けられない。

弱者を優先する？ だとしたら俺はどうして目の前にいる魔物を助けない？

目を逸らし続けた心が俺自身に問いかけてくる。分かってる。そんなこと分かってる。全て分かっているながら、俺は逃げていたんだ。目を逸らし続けていたんだ。厳しくて辛い現実から目を背け、正義を騙って殺戮に逃げていたんだ。どうしようも無いくらい分かっていたくせに、自分さえ欺いて、分からないふりを続けた俺は大嘘吐きだ。

ああ、俺は一体どこから間違えていたのだろうか？

俺は人々を救わなければならぬ

何故なら、勇者とは人々を救えるだけの力を持っているからだ  
それでも救われない魔物ひとひと、俺は見てみない振りをしてた

俺は勇気を失ってはならない

何故なら、勇者とは悪に背を向けることなど許されないからだ  
それなのに目の前で繰り返される戦あくを止める勇気も無く、俺は逃げ続けた

俺は正義を裏切ってはならない

何故なら、勇者とは正義の味方であることを求められるからだ  
自身すら欺き、殺戮を続けた俺に名乗れる正義なんてどこにも無かった

俺は孤独でなければならぬ

何故なら、勇者とは平等に人々を守らなければならぬからだ  
元の世界に戻るといふ目的の為に全てに平等であることが出来ず、  
俺は魔物を見捨て続けた

俺は自分を捨てなければならぬ

何故なら、勇者とは常に弱者を優先しなければならぬからだ  
いつも俺が優先していたのは自分自身の命でしかなかった

ああ、なんてことだろう。俺は最初から今に至るまで、一度たりとも勇者なんかじゃなかった。俺は死ぬのが怖くて力に逃げていた  
単なる臆病者だ。

それを認めた途端に握り締めた拳から力の抜け、鍵が零れ落ちた。乾いた音が室内に響く。

知らないうちに握り潰していた鍵は見るも無惨に拉ひっぱげている。これで俺は二度と帰ることは出来ない。でも、そんなことはもうどうでも良かった。どうせ俺には帰る資格なんてない。

目の前でまた一人、魔物の子が殺されようとしている。

咄嗟に目を逸らそうとしたが、体が言うことを聞かない。恐怖で足が竦み、手の震えも止まらない。それなのに、怖くて怖くて仕方がないのに、それでも目を離すことが出来なかった。

俺は俺自身に言い聞かせる。

俺は勇者じゃない。恐怖に負けて魔物を何人も何人も殺してきた俺の罪は今更一人助けたところで赦されるものじゃない。だから、諦めると、そう言い聞かせた。

なのに、俺は逃げられなかった。

たとえ赦されなくても、それでも、俺は

十

今、俺が座っているのは玉座。かつて魔物の王が座っていたそれだ。

結局、俺は一人の魔物の子を助けるために人間を殺した。そのま  
ま、裏切り者と罵り剣を向けるかつての仲間を殺し、魔物の子を逃  
がした。

もちろんそんなことで俺が赦される筈は無い。俺が多くの魔物や  
魔王を殺したつていう事実は消えないんだから。

そこで死んでしまえば、殺されてしまえば、どんなに良かっただ  
ろう。でも、俺は死に損なった。仲間の仇と俺を恨む魔物の兵を殺  
し、裏切り者と俺を憎む人間の兵を殺し、そして、俺は全ての敵と

なった。

勇者になりそこなった俺にはお似合いの末路だと、思わず自嘲の笑みがこぼれる。

そういえば、世界はあの大戦以降少しだけ平和になった。それが悪<sup>オレ</sup>という共通の敵を倒すためというのが少し複雑ではあるが。人と魔物が休戦してくれたのは喜ぶべきことだろう。

そんなことを考えていると、不意に背後で窓の開く音がした。

「ここには来るなといつも言っているだろう」

視線も向けずに俺は言い放つ。これは挨拶のようなものだ。この言葉が何の効力も持っていないことを俺も相手も分かっている。

「だって、一人きりじゃ寂しいでしょ？」

悪びれた様子も見せずに返したのは、かつて俺が助けた魔物の子。仲間の目を盗んではここまで来ている。毎日会いにくるために随分苦労しているんだと以前言っていた。

まったく、折角助けてやったと言つのに自ら身を危険に晒されては心配する俺の立場はどうなるんだ。

溜息を吐きたくなる気持ちをぐっと堪えて、俺は吐き捨てる。

「俺は魔王だ。寂しさなど感じる筈も無い」

嘘だ。本当は寂しくて、心細くて、今にも泣いてしまいそうなくせに。

でも、俺は嘘を吐く。俺は嘘が得意だから。自分さえも欺けるほどの大嘘吐きだから、この子を損なってしまうことが無いように毎日毎日同じ嘘を吐く。

「魔王様の嘘吐き」

玉座の前に回りこみ、俺の膝に跨ってべっと舌を出して顔を顰める少女。先日成人したという彼女に少女と言つのは不適切かもしれないが、童顔なせいか少女と言つた方が相応しく思えてしまう。もちろん、助けた当時に比べれば随分と成長したし、なかなか器量の良い女になったとも思っている。

まあ、言えば調子に乗るのは目に見えているから決して言っ

どやらないが。

「嘘など吐かん。それと、襲われたくなかったら俺に近寄るなといつも言っている。それともなんだ？俺に襲わりたいのか？」

ここに来る行為は少女を危険に晒しこそすれ、良い影響を与えることは決してない。もう来ることが無いようにと脅しをかけるが、少女に怯えた様子は微塵も無かった。

これもいつものこと。だから少女が次に言うであろう言葉も予想が付く。きつと俺にはそんな勇気なんて無いとか言うのだろう。俺を信じて疑わない、太陽のように温かい笑みを浮かべながら。

「襲う勇気なんて無いくせに」  
「やっぱり。」

からからと笑う少女は心の底から俺を信じているようで全くの隙だらけ。こんなふうには誰かに信頼されるのも悪くは無いと、ずっと許容し続けたけど、もうそろそろ潮時だろう。

真の勇者に孤独が求められるように、真の魔王もまた孤独でなければならぬ。誰にも理解されず、世界中の恐怖と憎悪を背負ってこそ真の悪。それにはこの少女は不要だ。

少女の肩を掴み地面へ押し倒す。予想外の行動だったらしく少女の目が点になっている。

その顔を恐怖に歪ませて俺を拒絶すると、そう念じつつ、同時にそうなるとも信じていた。この手を振りほどき、軽蔑の視線で睨んで二度と現れないだろうと俺は微塵も疑っていなかった。

しかし、次の瞬間に少女は何を勘違いしたのか覚悟を決めたように目を閉じた。

違う、それは俺の望みじゃない。

「阿呆」

弾いた中指で額に一発。

「いったあー」

目尻に涙を溜めて、額をさすっている。

「さっさと帰れ、次は無いぞ」

忠告をくれてやるが、どうも効果は期待できそうに無い。溜息を一つ吐いて玉座へ戻る。

「……いくじなし」

返事はしない。少女がぽつりと零した言葉にも、じっとりとした恨みがましい視線にも気付いていない振りをする。

俺が玉座に座って少女から視線を外しても彼女はそのまま睨んでいたが、それ以上は意味が無いと諦めたのか、しばらくして刺々しい視線が消えた。代わりに少女は玉座の背もたれに反対側から背を預け、それまでとは打って変わった真剣な声音で俺に訊ねた。

「ねえ、何を待ってるの？」

何を待っているかって？ そんなの決まっている。

「勇者だ」

「そんなものいないわ。人間なのに魔物のわたしを庇ってくれたあなたが勇者じゃないなら、この世界にはそんなものどこにもいない」  
確かに、今はいないのかもしれない。でも未来は誰にも分からない。だから俺は信じるんだ。いつか悪を討つために、本当の勇者が現れることを。

「いや、いるさ。俺は信じてる。ここに悪がある限り、勇者はいつかきつと現れると」

俺がそう答えると、少女の思い詰めたような真剣な声が返ってきた。

「どうしたらあなたを救えるの？」

「なんだ、いやに唐突に質問が変わるな。さっきの質問はもういいのか？」

こんな質問をされることは今まで無かった。こんなに真剣な声で俺に何かを訊ねることも、無かった。わずかに生じた不安を掻き消すために言葉を濁してかわそうとしたが、いいから答えて、とより強い声で促されるだけ。仕方がない、と少し考えてから答える。

「……………そうだな、俺が救われるとすれば、それはきつと本当の勇者ヒーローが現れた時だけだ」

返事はない。長い長い静寂が落ち、それを破って少女は言った。  
「……わたし、当分来られないから」

少女が何を考えていたのかは俺には計り知れないが、来ないという申し出は歓迎こそすれ文句を言う謂れは無い。俺はそうか、とだけ返すに止まった。

不意に少女は俺の前に回り込んで、覗き込むように顔を近づけた。唇に一瞬生まれた確かな温もり。今まで生きて来た中では経験の無い事態に頭がぐるぐると回って思考が覚束ない。

「しばらく会いに来られないんだから、お守り代わりね」

それが、俺と少女のどちらに対するお守りだったのかは分からない。問いたただけの心的な余裕も無ければ時間的な余裕も無かった。俺が思考を回復するより前に、少女は来たときと同じように漆黒の翼を広げて窓から去っていった。

十

それから早数年の月日が流れた。少女がいなくなったことに初めこそ物足りなさを感じたが、今では独りが当たり前だ。

その間も勇者を名乗る者が幾人も俺の下を訪れたが、どいつも本当の勇者には程遠かった。俺に挑もうとするだけあって力は申し分ない猛者ばかり。しかし、如何せん心構えが足りていない。ある者は金のため、ある者は名誉のため、ある者は権力のため。

違う。そうじゃない。

真の勇者とはそういうものに動かされてはならない。

いつまで待てばいい。俺はもう疲れてしまった。

やっぱり、あの少女が言ったように俺の信じる勇者はいないのだろうか。そんな諦念が俺を支配しそうになる。

その時、誰かが城に足を踏み込んだ気配がした。数は一つ、力量を見極めるために仕掛けた罠の数々を軽々と突破し、瞬く間に近づいて来る。そして、数刻もしないうちに気配は扉の向こうにまで辿

り着いた。

玉座から立ち上がり、扉に正対して立つ。

今度こそ、今度こそ俺の望む本当の勇者だろうか？  
捨てきれない期待。

どうせ、こいつも私欲にまみれたにわかに関わっている  
否定する諦観。

せめぎ合う両者を押さえ込み、玉座の前で静かに待つ。

扉がゆっくりと開く。その向こうに現れたそいつの見たことも無い姿に俺は目を瞠った。

全身を覆う鎧。俺はそれを知っている。

それは魔物に比べて能力の劣る人間が創り出した特殊装備。装着者の魔力を最大まで引き出し利用するため限界まで魔法を行使でき、その上金剛石並みの強度を持ちながら羽のように軽いのだ。

しかし、群を抜く性能を誇るこの鎧にはたった一つの欠点がある。そして、その欠点こそが最大の問題。それは装備者の命を削るといふもの。当然だろう、生命力と同等である魔力を限界まで引き出しているのだ。使用し続ければ死に至ってもおかしくはない。

こいつが身に着けている鎧はそういうものだ。  
もちろん、それだけなら俺も驚きはしない。目が惹かれた理由はもつと別。そいつの背にあった翼。いや、正確には翼の残骸だ。

人間には翼など無い。ということとは必然的に魔物ということになる。だが、この鎧は魔力で形を保たれる関係上、使用者が死ぬと同時に壊れてしまう筈だ。殺して奪い取れるわけが無い。

となれば、人間側から譲渡されたということか？　そして、翼がこれほど酷い状態になった経緯は？

「何故、魔物がその鎧をもつ？」

訊かずにはいられなかった。膨らむ期待に鼓動が高まる。

「魔王を倒し、人々を救わんがために人の王より譲り受けた。我が右の翼を以って人への友好を示し、我が左の翼を以って魔への忠誠を誓ったのだ」

答えを聞くと同時に震える体。それは恐怖じゃない、歓喜。

こいつこそが待ち望んだ勇者かもしれない。そう思うと、ついさつきまで諦念に支配されそうだったのが嘘のように心が沸き立った。声に聞き覚えがあるような気もしたが、そんなことは既にどうでも良かった。俺にとっては目の前のこいつが俺の望む勇者かどうか以外に何の価値も無い。

「そうか。いいだろう、相手をしてやる」

言って剣を抜く。それが開幕の合図。同時に舞のようにしなやかな剣戟が容赦なく襲い来る。何度も何度も刃を交わし、魔法を互いにぶつけ合う。

どうやら力は俺と同等のようだ。能力としては申し分ない。だが、それだけでは足りない。真に勇者足るには条件がある。俺が最後まで持ち得なかった勇者の条件が。

刃を競り合わせながら俺は問うた。

「お前は何の為に戦う？ 人が魔物か？」

「人とか魔王とかは関係ない。わたしはこの世に生きるもの全ての為に戦う」

「怖れは無いのか？」

「怖いに決まってる。でも、わたしは逃げて大切なものを失う方が怖い」

「お前の思う正義とはなんだ？」

「みんなが笑って生きていられる世界の為に戦うことよ」

「大切な者はいるか？」

「生きとし生ける者全てが大事で、そこに優劣なんてつけられない」

「自分が大事ではないのか？」

「自分は大切よ。でも、それよりも大切なものがあるの」

涙が滲む。

ああ、本物だ。勇者は確かにいた。

こんなに嬉しいことは無い。この世界に救いが無いなんて嘘だ。だって勇者はここにいます。

後は悪を打ち倒すだけ。

でも、俺だつてそう簡単に殺されてやるわけにはいかない。俺は死ぬのが恐くて怖くてたまらないから、自分に嘘まで吐いて拳句に勇者になり損ねるような臆病者だから、俺は最後まで足掻く。死にたくない足掻き続ける。

さあ、勇者<sup>ヒーロー</sup>。俺を倒してみせる

十

体を貫く刃。傷口に灼熱のような痛みが生じた。剣をつたって地に落ちる血の赤さに、自分がまだ人間だったのだと安堵する。

ほんの少し前までは熱を帯びていた体も瞬く間に冷え切り、今は打つて変わつてやけに寒い。全身を襲う喪失感を決して後戻りできないことへの怖気となつて押し寄せてくる。待ち望んだ勇者が現れたのだという嬉しさはあるが、やっぱり死ぬのは怖かった。

俺は身を切り裂く寒さと心を侵す恐怖にうち震えていた。そんな俺の視界の片隅にちらりと入った黒。その色に俺は確かに見覚えがあった。

俺の顔を覗きこむように見つめるのは女。黒い髪に白い肌、モノクロの中に映える紅玉のような赤い瞳が印象的なその女は五年も前に姿を消したあの少女の面影を宿していた。以前は可憐という言葉が似合っていたが、今は佳麗と言った方が相応しく思えるほど美しい。もちろん、口に出して言うことは絶対に無いが。

懐かしい顔を感じ深く眺める俺の顔に水滴がぼつぼつと落ちてきた。雫がそのまま頬をつたって消える。

雨？ いや、違う。これは涙だ。

彼女は顔をくしゃくしゃに歪めて泣いていた。どうして泣くんだらうか？

俺には分からない。気付けば勝手に口が動いていた。

「どうして泣くんのだ？ 勇者はいたんだ。喜びこそすれ、泣く理由なんて無いだろう」

訊ねながら、手で涙を拭う。

「……ばか、嬉しくて泣いてるのよ」

搾り出すような声で返す彼女。

そうか、それならいいんだ。でも、嬉しいなら泣くよりも笑ってほしい。これは俺だけの秘密だけど、彼女は笑顔のほうはずっと魅力的だから。

なんとか彼女に笑顔を取り戻したくて、俺は拙いながらも言葉を紡ぐ。

「嬉しいときは笑うもんだ。泣くと折角幸運が近づいていても逃げてしまっただろう？」

こんなのは適当に言ってみただけの嘘。ただ、笑ってほしいっていう遠まわしな要求だ。

そんな俺の思いを知ってか知らずか、彼女はそうねと言って笑顔を浮かべた。それは、昔と変わらない太陽のように温かな笑み。

やっぱり、笑顔の方が何倍もいい。

気付けば体の震えは収まっていた。どうしてだろうと考える暇もなく、彼女が俺に問いかける。

「ねえ、あなたは救われた？」

そんなこと、決まってる。

「救われたとも。俺の望んだ勇者が現れたんだ。これで救われなきや嘘だ。それに……」

言いかけて口を噤む。

俺は今、何と続けようとした？

「それに？」

口籠もる俺を彼女が覗き込む。心配そうに窺う瞳を見て、理解した。

ああ、そうか、彼女がいるからだ。

勇者が現れたからだけじゃない。それだけなら俺の望みは救われなくても、俺自身が救われることはなかった。信じ続けた勇者の存在に歓喜して、けれど誰にも思われぬまま消えることに恐怖して、俺は矛盾する二つを抱えたまま死んだらう。

でも、ここには彼女がいる。ここまできて、俺が救われたかなんてことを気にしてくれるような優しい彼女がすぐ傍にいる。だから、さっきまであんなに寒かったのに今はとても温かい。

嬉しくて嬉しくて堪らない。今なら胸を張って言える。

「ああ、俺は救われた。真の勇者は悪を討ち、俺の願いは成就した。そして……今、俺の傍にはお前がいる。だから、俺は間違いないで救われた。ありがとう」

涙が零れそうになるのをぐっと我慢して目を閉じる。そして、彼女の優しさという温もりを感じながら、ついに現れた勇者に思いを馳せた。

ずっとずっと待ち続けて、ようやく現れた勇者。俺の望む理想の体現者。その勇者にも未来は無い。鎧の対価が勇者を殺すから。けど、彼が遺すであろう心は、自己を犠牲にして世界を救わんとする慈しみの心はきつと世界中の人と魔へ届くだらう。そうしたら、世界はきつともっと優しくなれる。

彼女の生きる未来がそうなれると思うと心が安らいだ。

ああ、眠くてしかたがない。もう、いいよな。

「少し眠っても、いいよな？」

「そう言えば、わたしもちよっと眠いかも……そうだ。ね、腕枕してくれる？」

「馬鹿、風邪引くぞ」

「大丈夫よ。二人寄り添えば暖かいわ」

言い返す暇も無く彼女は俺の横へと収まった。

「お休み。」

久しぶりに耳にした響き。それは、せがむ彼女に一度だけ教えて、

けれど決して呼ぶなと言いつ聞かせた俺の本当の名前。過去と決別するために捨てた筈のもの。なんのつもりか、その名で俺を呼んで彼女は目を閉じた。

まったく、呼ぶなとあれほど言ったのに。  
でも、まあいいか。とびきりの優しさで俺を癒してくれた彼女なら許してやらんでもない。

彼女が寒くないようにそっと抱き寄せる。余程疲れていたのだから、静かに眠った彼女は少しも動かなかった。

穏やかな顔で眠る彼女を見ると、愛しさで堪らなくなつて、そつと額に口付けた。

可愛い寝顔が少し惜しい気もしたけれど、押し寄せる眠気は既に我慢の限界だ。聞こえていないのは承知の上で、彼女の耳元で囁くように眠りの挨拶を、別れの挨拶を告げる。

お休み。愛してる

十

かくして、世界最後の魔王の……いや、ただの少年の物語が幕を閉じた。

廃墟のような魔王城。寄り添うように横たわった人間の男と魔物マオウの女メ。二人は互いを守るように抱き合いながら永い夢路へと旅立っていた。まるで救いを得たかのように、満たされた微笑を湛えて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4140o/>

---

勇者の条件

2011年11月16日20時46分発行